統計の眼

「高齢農業者と地域社会」

農業への若者の参入が限られている中で、高齢農業者は農業の中心的な担い手としてだけでなく、地域社会や地域の伝統の担い手として大きな役割を果たしている。今年二月に発表された農水省の「高齢農業者に関する意向調査」の結果では、こうした実態が浮きぼりにされた。

同調査は、六五歳以上で自営農業に従事している人を対象にして行われた。「農業へのかかわり方」について聞いた質問に対しては、「自分が中心となって農業を行っている」と答えた人は全体の四二％にのぼり、「自分一人で行っている」（一〇％）をあわせると、過半数の世帯で高齢者中心の農業が行われていることがわかる。年齢別に見ると、「自分が中心」と答えた人の割合は六五～六九歳の人で五一％、七〇～七四歳で四三％、七五歳以上でも二九％に達している。

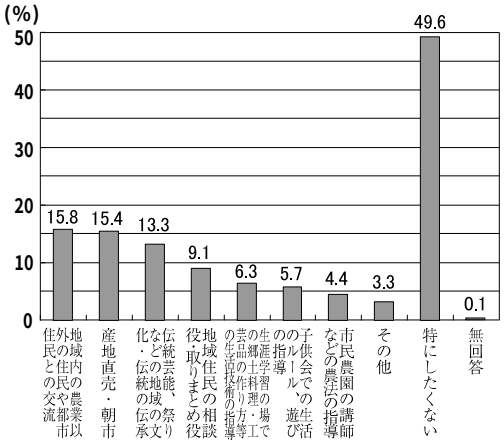
また、「農業を行うことの意義」についての質問に対しては、「食料を生産する大切な仕事」（四一％）、「家業の継承」（三九％）、「やりがいがある」（三三％）、「自分の裁量で仕事ができる」（三二％）となっており（複数回答）、誇りとやりがいを感じながら農業に従事している高齢者の姿がうかがわれる。

地域社会との関わりについて、「行ってみたいグループ活動」を聞いたところ（図）、「特にしたくない」という回答が数的には最も多いものの（五〇％）、「地域内の農業以外の住民や都市住民との交流」（一六％）、「産地直売・朝市」（一五％）、「伝統芸能、祭りなどの地域文化・伝統の伝承」（一三％）などが多かった。「市民農園の講師など」（四％）もあり、地域社会への貢献や都市住民との交流に対する高齢者の積極的な姿勢がみてとれる（複数回答）。

高齢化社会の到来を迎える中で、農業・農村においてもこうした活発な高齢農業者の役割を積極的に評価し支援していくことは、農協や政府にとっても大切なことだと考えられる。

（須田）

高齢農業者が希望する地域社会でのグループ活動



農水省「高齢農業者に関する意向調査結果」